

三家考

坤

和書門			
二	三	九	二
冊	架	函	八
		號	〇
			三
			類

內閣文庫			
四	三		和
九	八		書
函	〇		
一	三		
八	二		
架	冊	號	類

內閣文庫			
番號	和	22803	
冊數		(2)
函號	149		88



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



三原秀郎

三原秀郎 三原秀郎 三原秀郎 三原秀郎 三原秀郎

三原秀郎 三原秀郎 三原秀郎 三原秀郎 三原秀郎

三原秀郎 三原秀郎 三原秀郎 三原秀郎 三原秀郎

三原秀郎 三原秀郎 三原秀郎 三原秀郎 三原秀郎

三原秀郎 三原秀郎 三原秀郎 三原秀郎 三原秀郎

三原秀郎 三原秀郎 三原秀郎 三原秀郎 三原秀郎

三原秀郎 三原秀郎 三原秀郎 三原秀郎 三原秀郎

三原秀郎 三原秀郎 三原秀郎 三原秀郎 三原秀郎



三家考坤

棋州多田院御家人由緒書曰源滿仲公相州鎌倉ヨリ

棋州多田庄ニ至リ至リ至リ康保五年二月滿仲公住吉江參籠

則此所ヲ新田ト唱フ此外ニ御家人ノ屋敷地ヲ定皆是

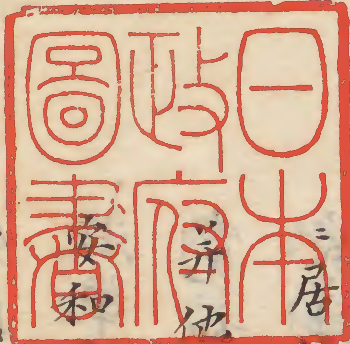
則此所ヲ新田ト唱フ此外ニ御家人ノ屋敷地ヲ定皆是

則此所ヲ新田ト唱フ此外ニ御家人ノ屋敷地ヲ定皆是

則此所ヲ新田ト唱フ此外ニ御家人ノ屋敷地ヲ定皆是

則此所ヲ新田ト唱フ此外ニ御家人ノ屋敷地ヲ定皆是

於我滅後末世擁護朝家武家三空降伏諸魔故沒後



明治十一年

廟所ニ一ツノ不思儀有之ハ此願成就セントナリ翌二年
法華三昧院建立今多田院ノ儀号鷹尾山廟所寺
寛和二年八月十五日法華三昧院ニテ七十八歳ニテ出
家任王ノ多田院満慶ト法号セリ此時御家人ノ老臣
等共ニ出家シテ近仕ス長徳三年八月廿七日ニ壽八
十六歳ニテ薨逝ス末朝ノ記文曰吾没後御留此廡
窟可守弓矢家加之以當院鳴動可知見四海安危
者也御家人等ハ有遺言則御自作ノ甲冑帶劔ノ
尊像ヲ備宝殿神祭其後鳴動度々ニシテ令知日

本之善悪古者鳴動ノ每度令奏聞由記録ニ其時日ヲ
書記セリ多田御家人等多田庄能勢郡ノ領地ノ内ニ
一城ヲ構エテ御社ヲ守護ス先例ハ禁裏ヨリ守護番
等ヲ被置タリ

新田政所原卿政所ト申御家人ノ内ニテ政所ヲ立置
此儀多田院ノ舊記數通ニ悉載セタリ且又三河國ノ
内ニモ御家人ノ領地在之ニ付新田政所新田五郎家氏
三州ニ来住ス其節上津村兵部丞福武三州八橋ノ
杜若ヲ取畝多田ニ植置テ今ニ榮茂ス

語曰三州八橋ハ杜若絶タル所ニ爰ニ所在奇ナリト

信長ノ代ニ御家人ノ内塩川伯耆信長御旨ニ叶フ

語曰塩川伯耆守政ヲ專ニ信長是ヲ感賞シテ金銀ヲ賜ト

將軍家譜ニモ載タリ此儀ハ伯耆守カ娘ヲ信長妾トシテ

寵愛ス最伯耆モ諂多故ナリト

故曰威勢ヲ振テ多田ノ御家人等ヲ手下ニ付ント企ル

然トモ皆不相随ニ付面々威ヲ失ヒ居タリ

語曰塩川此時能勢一黨ノ者共ト牙楯ニ信長へ申立其

所領ヲ奪此時西能勢ヲ煽流皆断絶ス則能勢ノ領地

多田ノ庄モ塩川知行ス大納言秀長ニ賜時和州旌

然ル所秀吉ノ代ニ及テ塩川伯耆知行召放サレシ節

多田ノ社領并御家人等知行被召上

語曰天正十三年大和河内紀伊ヲ大納言秀長ニ賜時和州旌

頭筒井伊賀守ヲ伊賀へ所替ヒシメ古来ヨリノ大和國人ハ皆

秀長ノ家人ニ被付秀長ノ養息中納言秀俊早世シテ

其家断絶ヲ以カノ大和ノ國人モ秀俊不幸ニ連テ所領ヲ

夫ノ撰州ノ儀モ信長ノ代ヨリ能勢郡多田ノ庄ヲ塩川

伯耆守領地下成ヲ以塩川所領ヲ被召上ニ付テ此辺皆没収地

トナリ各所領ヲ失フ、
依之浪々ノ御家人等ハ秀吉ハ恨有者共ニ舟大坂御陣
ト成刻ハ渠等御當家ノ御手下ニ參上可仕ト冬御陣
ノ刻撰州中嶋迄出陣仕ニ所ニ此赴大坂ハ相聞ニカハ
多田ノ銀山奉行方ハ秀頼ヨリ被命多田御家人等ノ
兵具ヲ不殘被石取候翌復御陣ニ大坂方ヨリ
銀山ニ伏勢三百余人有之由聞附テ意恨旁以是ヲ討
取御忠節ニ備ント元和元年五月六日彼方迄馳向処翌
七日大坂ヨリノ後卷ニ逢テ大方討死ニテ其功空ニク成

ニカハ弥流浪ニ及タリ

御判

下 多田院御家人中

可令早領知撰津國

多田庄地頭職事

右為勲功之賞所宛行也者隨忠之淺深各
可配分知行狀如件

文安元年十月四日

應安元年

寄進 多田院

下 撰津國多田庄猪淵村之事

右當庄者御家人等為勲功之賞拜領地也今

為祈天下太平庄内安穩以件村元如一圓所

奉寄附於院家也仍任衆議之赴評詎衆加判

之狀如件

建武四年四月八日

沙彌 西向
僧 快賢
沙弥 淨蓮

沙弥 康心
沙弥 道秀
橘 有仲
源 道直
沙弥 心通
小野 為時
源 賴仲

新田山ノ圖

教氏

世良田二郎

持親

源太新田政所沙弥

景満

次郎満氏
瀬川合戦討死

満義

親季

寺倉右京

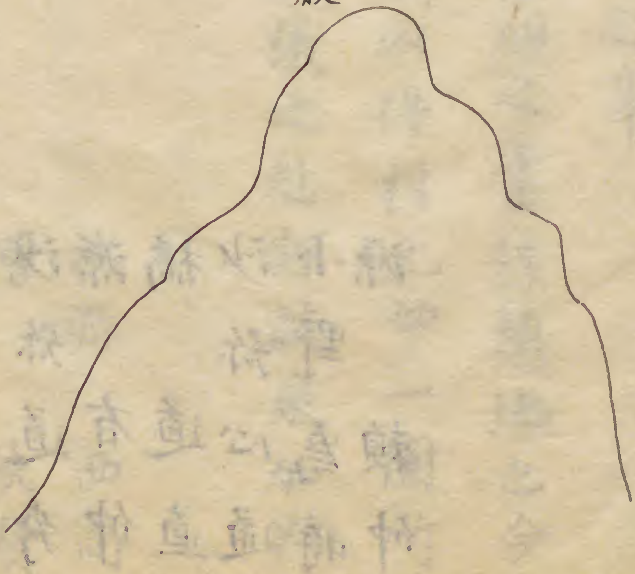
有親

四郎林鐘院殿
小童寺納

家氏

新田五郎

下ノ山ノ形アリ



○治安元年七月廿四日頼光薨六十八歳神祭尊

厩多田院ニアリ

○康平三年九月朔日頼信薨七十三歳神祭

○永保二年十一月十三日頼義薨八十八歳神祭

○長治二年八月十八日義家薨六十七歳神祭

寛文四年辰多田院御建立此時五代將軍一守御勅請
ナリ源家長世ノ守護神ト奉拜

○多田満正ハ満仲公ノ嫡男也天延元年八月廿四日

卒廿四歳ナリ

多田庄内波豆村奥殿八幡ト号ス

古ヨリ多田院堂供養御法事等之節ハ御家人守護仕候
當時御社堂御修覆ニ付迂宮御法事等ニ只今流浪ノ
御家人トイヘ任古例筋目ノ者凡罷出古例ノ驗計
守護仕候先年ヨリ勤来処舊記繪圖等多田院ニ
有之

○元祿十年丑二月

先年御家人勤来候守護

正月朔ヨリ七日迄天下太平ノ御祈禱

同十五日神前弓始
同廿八日滿仲公本地不動供
二月十五日涅槃會九頭蛇祭
三月十五日源姓御祭八幡行
五月朔日馬乘神事
七月廿四日賴光御社社祭
八月朔日神前相撲
同十八日義家御社社祭
同廿七日滿仲御忌法華八講

同廿八日神前能

九月朔日賴信御社社祭

同上郊日五穀成就ノ祈禱

十一月三日賴義御社社祭

十二月十五日十六日十七日佛名會

右外將軍家御代々御忌日参勤

二月 每年八月廿七日御神事供奉次第

御旗獅子牡丹長柄十本鐵炮十挺弓十張神馬一匹

神輿出御還御ノ供奉御旅所御家人守護

右元祿九子年多田御社御修理ニテ満仲公七百

御年忌ノ御法會并御贈官被為成御迂宮御法

會ノ砌右之驗計奉守護候且又初テ神輿被為

渡御神事被仰附御繁栄難有御家人輩右之通

出之御旅所ヲ守護ニ今年元祿十年丑二月迄

御神事無懈怠務候此外ニ唯今相勤申儀ハ

長日護摩供天下泰平五穀成就之御祈禱永代法

萃千部每年三月八日ヨリ十八日迄修行

右此両品ハ御家人等能勢多田勸化仕テ相勤申候

願人惣代

多田兵部

谷内藏右衛門

多田院御家人舊記

新田政所

原郷政所

今吉左衛門入道

久之知兵衛尉

塩川左衛門尉

田井柄馬亮

山問右馬入道

安福右馬入道

森本兵衛尉

織近源太入道

今吉宮太

高岡源四郎

田中紀四郎

西留左衛門

山本左近太郎

佐藤三

猪谷左藤太

石道進士

方至紀五郎

田原紀四郎

野間四郎

今吉 萬助

一樋 新太郎

萬善源 三郎

上津村 左藤太

柴合村 春名分

平井 小野四郎

對津 左藤九郎

池 藤兵衛

散所御家人

吉川 判官代

山田 左衛門入道

石田 太郎左衛門

大町 太郎左衛門

木津 常陸房

黑田 新太郎

西山 ^{一作勇} 中將

佐曾 ^{一作柳} 利八郎

小野 ^{一作柳} 右馬亮

原田 ^左 庄衛門

木器 下山左衛門

北田原

槻並 枳祢庄 六瀬

多田院御家人名寄

西山 奎之丞

上津村 十郎平

山田 弥兵衛

能勢村 右衛門

寺倉 清右衛門

吉川 勘兵衛
森本 弥兵衛
出口 與一兵衛
一植 奎左衛門
山庄 司武兵衛
山本 勘兵衛
松山 兵右衛門
黑田 權兵衛
小笠原 新之丞
西留 小左衛門
八代 平左衛門
前西 利兵衛
本射 源右衛門
西村 伊右衛門

目賀多 伊兵衛
黒川 太庵
下堂 三之助
原七 左衛門
平居 三郎右衛門
野村 儀右衛門
長谷 守兵衛
中田 傳右衛門
久々 知善兵衛
福田 与右衛門
田中 八兵衛
安村 源藏
井上 源右衛門
大塩 祖元

中西五郎左衛門
國津利右衛門
細谷十郎兵衛
三矢^{作波}旌兵衛
河^波門
多田兵部
脇田四郎左衛門
谷内藏右衛門
安福 柳軒
石道仲右衛門
以上四十三人

右輦ノ先祖滿仲公ニ奉仕シ相州鎌倉ヨリ撰州

多田ハ御移ノ節隨身仕後未滿仲公御遺言ニテ
多田庄内七十二箇郷御開闢地被下置代々能
勢多田ニ居住仕テ御廬社奉守護処天正年中
秀吉御代多田院社領并御家人等ノ領地悉被
石上其以来名跡モ斷絶仕躰ニ罷成候
語曰滿仲公相州鎌倉ヨリ撰州多田ハ移玉フト言事ハ
御父六孫王經基ニハ東夷將門退治ノ列成モ関東ニ領
地有故ナリ依之滿仲モ東國ノ任ヲ勤玉フ也頼義義家
兩代奥羽ノ合戦ニ東國ノ武士相隨戦功セシモ將軍ノ

威アリトイハ氏實ハ經基滿仲以來ノ御別荘ナリ
關東武士頼朝ノ味方ヘ来テ忠勤ニ御家人ト唱タルモ
此所縁ナリ亦上州新田ノ郷モ多田新田開闢ノ土地
ノ名ヲ移シ政所ヲ撰州ヨリ下ニ置玉フヨリノ名ナリ
根元ハ足利領内ナリ滿仲公ヨリノ所縁ノ地ヲ以義家
迄モ傳來存其男義國足利ニ下向ニ新田モ其内ノ
領地ナレハ義國ヨリ嫡男義重ヘ新田ヲ渡其家ヲ
興セシムト云云

大徳川世良田之事

新田義重ノ四男義季徳川四郎ト号ス新田庄世良
田ノ郷徳川ノ邑ニ居住ス是父義重ヨリ配當ノ領
地ナリ亦徳川二郎ト号スルハ三男義兼ヲ父ノ家
督ト定ヲ以是ニ指續テノ二男ノ故ナリ是等當
腹ノ故ナリ此分小新田ト称ス義季ノ嫡子ヲ頼有ト
云徳川太郎ト号ス二男ヲ頼氏ト云徳川弥四郎ト号
ス又世良田ト名ノル後三河守ト改号ス此人父義季
ノ家ヲ相續ス其所以ハ新田本家義兼ヨリ四世

新田又太郎政氏京都大番ノ懈ヲ以被没収ニ付
其所領半分宛分ケテ徳川四郎義季ト岩松遠江郎
時兼ト是ヲ預義季支配ス是義重ノ直ニ子息ニテ
一族ノ長タルヲ以ナリ故ニ新田ノ総家ヲ持ツ本家
政氏ノ子息恩免ノ刻両家へ預ル所ノ本領ヲ其
子息新田太郎基氏方へ相返ス岩松へ預分ハ不残
返ニ徳川へ預ル所ハナリノ物五ツハ残ニ置タリ故ニ
徳川家領地他ヨリハ多ニ斯ニテ義季ヲ新田
大入道殿ト称ニ徳川家ヲモ新田ト呼タリ故ニ義季

ノ嫡男徳川太郎頼有ヲ新田下野守ト号シテ新田ト續
テ名乗ル此人男子無ニ付息女ヲハ岩松五郎経兼へ
送置ヲ以其子ノ岩松太郎政経ハ外孫タルヲ以養子ト
シテ新田下野守ト名乗シム依之頼有ハ新田下野前司ト
号ス亦江田下野前司正唱然処ニ頼有實子下野太郎
頼春出生生長ニ付新田徳川ノ家ヲ相繼シメ政経ニハ
實方ノ岩松ヲ以西谷隱居入道シテ西谷頼宥ト号ス
是岩松ニテ新田ノ本家ヲ相續スト云事實ナリ新田
徳川両家ヲ相待^傳処ナリ此政経入道頼宥ニ數男子

アリ嫡子新田伊豫守義政ニ養父頼有ノ配分地ヲ
讓新田ト名乗シム故ニ世良田氏唱貞治三年七月
謀反上州如来堂ニテ自害頼宥ノ庶子岩松兵部太輔
直國後日ニ將軍方トナリ鎌倉ノ基氏ニ近仕シ武州
用土山ノ戦ニ忠ヲ盡クテ以家ヲ立タリ其賞トシテ新田
伊豫守義政ノ没収ノ地ヲ賜是ヨリ岩松家子孫相續ス
義季二男頼氏世良田ト号嫡男ヲ世良田二郎教氏ト
云二男ヲ江田三郎有氏ト云後遠江守ニ改ム教氏ノ
子ヲ家時ト云或家持異
說持親世良田太郎ト号新田庄上

江田中下
江田田中村世良田郷徳川村等ヲ領スト世ニ申傳
不詳其子満氏ト云ヘリ世良田二郎ト号ス一説ニ江田三郎
江田一
所也其子満義世良田弥二郎ト号ス其子孫ノ内
三州ニ来住シタリト云

並合記附録曰徳川藏人義季ニ三子アリ嫡子
世良田下野守頼氏二男徳川四郎頼有三男世良
田弥四郎頼成後三河守ト号此頼成ニ二子アリ
嫡子世良田遠江守有氏二男江田三郎満氏ト云
有氏ノ嫡子兵部太輔行義二男左衛門尉家氏

満氏ノ子ヲ二郎義氏ト云又頼有ノ子太郎頼泰
ト云其子ヲ四郎頼尚ト言其子二郎尚氏ト云惣
嫡頼氏ノ子教氏ト云二郎ト呼其子三郎家時其
子下野守満義初満義ニ子アリ嫡右京亮政義
次ヲ大炊助義秋ト云政義ニ子アリ嫡子修理亮
親季ニ男萬徳九政親ト云親季ノ子ヲ左京亮
有親ト云次ハ女ナリ義御前ト云テ上州徳川萬
徳寺ノ本願ナリ有親ノ嫡子徳川三郎親氏ト云
後松平太郎左衛門ト改号スニ男泰親後松平

三河守ト改号ス未女ハ庄ニシテ妙阿弥ト号ト云
其満義ニハ新田義貞ト相共ニ後醍醐天皇ノ軍
ヲ勤テ勲功ヲ盡セシカ武藏野笛吹等ノ合戦ニ
味方敗績ノ後ハ世良田ノ郷ニ潜居シ病死ナリ
子息政義^續義秋兄弟ニハ後醍醐ノ王子方トシテ
忠ヲ盡ストイハレ脇屋右衛門佐義治ノ子新田
相摸守義隆相州箱根ノ山中城ニ隠時節ヲ窺
時城主木賀彦六入道秀澄異心ニテ應永十年
四月鎌倉持氏ヨリ安東軍人佐ヲ以人數ヲ被差向

安東兵ヲ隱ニ置木賀ト謀ヲ回シ義隆ヲ底倉ノ
温泉ニ欺入レテ是ヲ害シ其ヨリ東國上州寺尾ニ
忍居王ノ宗良親王ノ御子尹良親王ヲ討取ント衆ヲ
揃ル由相聞ヘケレハ宮ハ寺尾ヲ出テ信州諏訪ヘ移
王此時政義ノ息親李政親兄弟ニモ此動乱ニ遭ヒ
世良田ノ舊居ヲ立退寮居セリ万徳丸政親ニハ尹良
御供ニ並合ノ危難ヲ遁レ尹良ノ御子ニ付從尾張ニ
到夫ヨリ三州ニ潜居シ松平太郎左衛門ト改号シ
後年ニ及テ出家政阿弥陀佛ト号上州万徳寺ニ

在テ文正元年十月ニ寂スト本文ニ載タリ

政親ノ事新田庄岩松家ニテ終ニ其名
不知其所ニテモ覺ヘテ不云傳トナリ

新田徳川世傳記後風土記等同曰新田義貞戦死之後

徳川政義親季父子二代流浪シテ本國徳川ニ蟄居
ス親季ノ子有親其子親氏共ニ新田ノ氏族ナレハ
義貞滅亡以來京都將軍家ヨリ根ヲ断葉ヲ枯ス
ヘキノ下知ナレハ身ヲ潜メ所々ニ流浪セシカ鎌倉管
領持氏ノ親父足利左兵衛佐満兼ノ時縁ヲ求降
参ニ本領ナレハ上州世良田徳川ヲ安堵シテ持氏ノ

代迄鎌倉ノ御家人ナリ左馬頭持氏ニ永享年中
京將軍義教ト不和出来テ討手被差下付持氏ハ
武州高安寺ニ陳取防戦セシカ不叶相州海老名陣
ヲ替テ猶軍兵ヲ被催ニ付有親父子合テ十二騎
雜兵合八十余人持氏ノ陣ニ加リ力戦セシカ敗軍ニ
及ヲ以寄手鎌倉ヘ乱入ス有親父子来テ持氏ノ
子息義久ヲ守護スト云臣不叶一方ヲ討破義久
ヲ伴ヒ其場ヲ切抜シカ十月一日ノ夜闇ニ襲来敵ニ
被取圍漸辛キ命ヲ全シテ本國ヘ皈入ス斯リシカハ

持氏父子生害ニテ關東ハ皆京將軍ノ下知ニ應シ
管領上杉憲實ノ威勢大ニ盛ニシテ關東ノ製^制法
アラタニシテ政務嚴ナル事益稠ニ故ニ持氏ノ殘黨
猶以被搜中ニモ新田ノ一族ハ別シテ根葉ヲ可斷
枯トノ事ナレハ有親父子德川ノ邑ニ安坐ナリ難ク
永享十一年三月潜ニ相州藤沢ノ道場ニ入テ入
道シテ時宗ノ僧トナリ父ハ長阿弥子ハ德阿弥ト
改号ス然リシ後ニモ東國ノ住居叶カタク信州ニ赴
翌年六月父子伴テ三州へ来坂井郷ノ民家ニテ

一兩年ヲ送ルノ後松平郷ニ移レリト云

徳川家上州新田在住ノ時四人家長アリ庄田木暮
水戸石川ト云各上州退轉ノ時分散ニテ庄田カ子
孫世良田郷ノ内ニ土民ト成テ残ル其他ハ斷絶ニタリ
徳川家三州ニ在位スト云ハ松平ノ徳川御家臣タル
今ノ石川氏ニハ上州ヨリ三州へ來テ奉仕スト云ハ古
來ノ石川此家カ舊家ト云ハ中年ノ相續ヨリ云カ
不詳岩松家ノ家長ヲ横瀬沼尻島金井ト云四人
ナリ岩松ノ新田治部少輔昌純ヲ其横瀬雅樂助成
臣

繫弒逆ニテヨリ威勢ニ募岩松本城金山ヲ我物トス
其子雅樂助國繫代ニ秀吉公關東征伐有テ常州
牛久へ移サル關東ハ家康公ノ御領ト成國繫新
田退去ノ時ノ岩松ハ昌純ノ嫡孫新田治部太輔守純
也ニカ桐生へ引移リ其後故郷ナレハ新田へ立戻リ
住居スト云凡浪々ナリ金山實城住居ノ時ヨリノ實
城付ノ家人金谷筑後酒庭主水始終附隨ヒ奉仕
家康公ニハ岩松ノ新田ノ事御聞及ニ付守純カ子新田
治部太輔豊純石ニ應ニ奉テ一見御系圖ヲ可仕旨其
不肯

方系圖ヲ又得ト御覽可有間殘シ置ヘト仰アレ
不許諾ニ付御機嫌ヲ損シ重テ不被石然何トソシテ
新田家ノ系傳御吟味有度思召ニ付テ幸ニ徳川ノ
舊臣庄田カ子孫被地ニ罷在ヲ以テ被為召早新田へ
立皈新田ニテノ古來ノ由緒註日議仕可申上由被仰付
処ニ江戸御本丸ニテ御能近日有之由ヲ聞テ田舎
者ノ珍事ト見物ノ為ニ逗留シ江戸ノ町人等ニ交
テ御白洲ニ入テ見物ス是ヲ遙ニ御覽ニ渠ハ庄田
隼人成カ一昨日急ニ可立皈由被仰渡処ニ未罷立

渠ヲ召セト呼セ玉フ処ニ面ヲ横へ振向テ不知顔ニテ
居タリ故ニ渠モ御旨ニ不叶皆首尾ヲ仕損シタリ

横瀬雅樂助ハ素姓ハ京都四条通連歌師小野宗等
子也尚純京都在番ノ砌石連出頭ニテ尚純家ノ老臣
横瀬主水ノ家ヲ續シメ横瀬專太郎ト言ヘリ

○新筑考本ノ通ヲ系圖ニ顯ス所ナリ岩松滿國入道
法泉ニハ實子治部太輔早世ニ付テ新田義宗ノ子ヲ
以家督トシ治部太輔滿純ト名乗シム是天用ナリ此
滿純上杉禪秀ニ組ニテ鎌倉ノ持氏ニ敵ニ終ニ生害

ス故ニ滿國副子無ヲ以弟某ノ二男能登守滿春カ
子ハ曾孫ノ訖有ヲ以名跡トス是滿國ニハ滿純ヲ養
子ト定ルト云凡一跡ハ未渡滿純ハ自分ノ祿モ有テ
名跡ヲ繼迄十レハ生害スト云凡滿國ハ家ヲ立祿ヲ
所持セル故滿純生害ノ後曾孫持國ヲ以家督ヲ讓
タリ滿國ヨリ持國ノ讓狀モ嫡子嫡孫ニ非サレハ
後來相爭モ出来カト念ヲ入タル文言ニテ親父能
登守ニテモ斯ノ讓與ル家督ニ構ル事不可有ト云
然レハ滿純生害ニテ二十余年ノ間ハ持國相續ナリ

滿純カ子家純ニハ父生害ヨリ二十余年ノ後京都
將軍義教ヨリ軍功ノ賞トシテ新田庄ノ闕所ヲ
賜フヲ以身ヲ起家ヲ立ヲ以父滿純ハ新田義宗
實子後新田ト号スルヲ以家純ハ新田ト名乗子孫
相續ニテ新田ト号ス斯訖ニテ滿國入道法泉滿純
家純ト系傳シテ持國ヲハ系傳ニ省来ナリ
爰ニ正木新左衛門ト云者アリ渠曰祖父ハ新田庄
右衛門ト云父ハ正木庄右衛門ト云テ本多上野介
家ニ二百石ヲ得テ仕フ上野介家斷テ守人ス新田

支流ノ者ナリト披露ス其記ハ新田岩松家ニテ持傳ク
ニ文署書物等所持ニ付是ヲ由緒トシテ大家ニ身上ヲ
カセクヲ以尾張ノ御家ヲ望松平撰津守義行へ手入シ
テ此文署書物不残一覽ニ入レシム撰津守殿ヨリ此
ヲ写シテ岩松滿次郎方へ賜フ是等ヲ以岩松滿次郎
方ニテ家傳ノ穿鑿益仕居タリ其家記享保十六年
辛亥ノ秋大久保忠喬上覽ニ入ヲ以テ彼正木力方ノ
文書等御會議ノ処ニ正木新左衛門ハ先年病死ス
男子ナク女子一人ノミニテ吉田梅庵室ナレハ其文署

類新左衛門死後不残梅庵妻ノ方ニアリ然ニ其妻先
年病死シ後妻ノ子梅庵カ家ヲ相續シ今ノ梅庵ナリ
當梅庵カ母先妻ノ持傳ニ右ノ文署等受取置此度
ノ御尋ニテ右ノ後妻方ヨリ是ヲ不残差上ル最無紛
物ナレハ是ヲ被石上梅庵方へ白銀五枚賜右書物等
公物ト成細ニ御披見ノ上ニテ岩松滿次郎カ系傳
持國可省ニ非ス滿國滿純持國家純ト傳来ヒ事
最ナリトノ上意ニテ彼文署ノ内撰津守殿ヨリ寫賜
處ニ洩シ一通御寫被下持國ヲ系リ可申記モ出タリ

其御写賜ハ持國へ送書ニシテ亡父大光ト云語アリ是
ヲ以見レハ大光ト言ハ持國カ父ノ事ナリ養曾祖滿
國ハ法泉ト云名アレハ持國カ實父能登守滿春カ
法名ヲ大光ト云カ何レモ大光科ト言ハ持國ノ
父タリ

村瀬英義曰此以下中古日本治記及徳川歴代記參河後風土記等可
載可書
新田家之世傳徳川家之来由松平軍記

鎮守府將軍前陸奥守源義家三男式部太輔義國ニハ
母ハ有國ノ娘ナリ近衛院御宇久安六年下野國足利
ノ別業ニ下向ス是新田足利両家ノ祖ナリ其嫡男義
重傳來新田家ナリ二男義康傳來足利也新田大炊
助義重ハ下野國寺尾ノ城ニ居住ス治承三年己亥
高倉宮御謀反ノ時兵庫頭源頼政入道ニ仰ヒ新宮
十郎義盛ヲ使トシテ令旨ヲ被遣諸國源氏ヲ被催
ニ付義重等ハ源氏ノ中ニモ一二ノ者ナレハ殊ニ憑

被下ニ付テ義重領掌シテ内々軍兵ヲ催ケル處ニ宮
ノ御謀及顯レ京ヲ御立退宇治川ヲ隔テ合戦有ト云
氏不叶頼政父子討死ニ宮モ流矢ニ中リ失セ玉ハ
國々ノ源氏ノ輩カヲ失フ翌四年八月頼朝謀反ヲ起
東國ノ軍兵ヲ潜ニ被催ケル時義重ヲ味方ニ被招シ
力ニ義重ハ自立ノ心掛ニ附所存有ト答テ是ニ不
應返書ニモ不能自ラノ城ニ引籠軍兵ヲ聚ム頼朝ニハ
東國ノ輩余多味方ニ參武威募ヲ以平家ハ黨シテ
味方ハ不參ノ輩ヲハ是ヲ討亡シ鎌倉ノ御館ヲ調移

玉ノ後同十二月廿二日義重入道上西方ハ足達藤九郎
盛長ヲ被遣被召寄ニ付義重叅上ノ處ニ無左右鎌
倉ニ不可入トノ仰アレハ山内辺ニ逗留ス是去ル項義重
ニハ軍兵ヲ招寺尾城ニ引籠由風聞有ト譴責ノ故也
義重答テ心中更ニ異儀ナシト云氏國中鬪戦有砌
輒城ヲ出難ノ由家人等諫申ニ付猶豫仕ル處ニ係ル
仰ヲ蒙事大ニ恐候ト陳防ス此事盛長様々執ニ申ヲ
以聞召被開免許ナリ又義重ノ嫡子里見太郎義後
ノ子太郎義成ニハ日来平家ニ相属シケレ氏源家ノ

繁栄ヲ傳聞京都ヨリ忝上ス是平家ヨリ源氏ノ一族
ヲ可追討由ニ付某關東へ下向仕一類申合頼朝ヲ可
襲討ノ旨偽申処ニ宗盛悦テ免許ニ付馳参候ト
申ケレハ其志祖父義重トハ異可昵近旨仰ラル同六
年七月十四日義重入道ニハ頼朝ノ勳氣ヲ蒙ル此
儀ハ義重ノ息女アリ頼朝舎兄悪源太義平ノ後
室ナリ此程頼朝ヨリ伏見冠者廣綱ヲ使トシテ潛ニ
艶書ヲ通セラルト云レ更ニ許容ナシ依之直ニ父
義重入道ニ被仰処ニ義重思案ニ及フト云レ御臺所

ノ嫉ヲ憚リ俄ニ彼息女ヲ帥ノ六郎ニ嫁セシム故ニ頼朝
是ヲ憤リ勳氣セラレ扱義重入道ニハ建保二年甲戌
正月十四日逝ス大光院義重上西禪定門ト号ス義重
入道ニ七人ノ男子アリ嫡子ハ新田藏人義兼二男ハ山名
三郎義範山名家ノ祖ナリ三男ハ新田大郎義俊里見
上野國
里見住 祖ナリ四男徳川四郎義季是徳川世良田ノ祖
ナリ五男ハ額戸五郎經義六男ハ新田冠者義光七男ハ
新田小四郎義佐末女ハ悪源太義平ノ妻ニテ帥ノ六郎
ニ再嫁ス徳川義季ノ嫡子ヲ徳川太郎頼有ト云二男ヲ

世良田弥四郎頼氏ト云フ後新田三河ノ前司ト号ス

頼氏ノ嫡子ヲ世良田小二郎有氏二男ヲ世良田次郎教

氏三男江田三郎満氏ト云新田義貞ニ奉仕シテ度々軍功アリ太平記ニ光義トアリ非也世良田

教氏ノ子ヲ世良田又次郎家持ト云或家持ト書スハ非也上野國新田

庄并上江田中下庄ニ三ヶ所田中村世良田郷徳川村等

悉皆家持所領ナリ家持ノ子ヲ弥二郎満義ト云世良田

太平記ニ江田二郎満義カ子世良田太郎政義ト云元弘三年

五月新田義貞ニ隨テ鎌倉ニ押寄セ江田里見鳥山田

中羽川山名桃井以下ト庄ニ稻村ヶ崎ヲ于河ヨリ敵ノ後ハ

廻ツテ安東左衛門聖秀入道以下此所ヲ防軍敗北シテ

自害ス各軍功アリ後年義貞越前國足羽ニテ討死之

後政義其子徳川修理亮親季父子二代流浪ニテ本

國徳川ニ蟄居ス親季ノ子徳川左京亮有親有親ノ子

徳川二郎親氏トニ祖父政義ヨリ新田ノ氏族ナレハ義貞

滅亡以來京都足利將軍家ヨリ根ヲ斷葉ヲ枯スハキ下知

ナレハ身ヲ潛メ所々ニ流浪成シカ鎌倉ノ管領持氏ノ親父

左兵衛佐満兼ノ時ニ縁ヲ求降参シテ本領成ヲ以上野國

世良田徳川ヲ安堵シテ持氏ノ代追鎌倉御家人ナリ

足利左馬頭持氏ニハ永享年中京都將軍義教公ト
不和ノ事出来シテ討手ヲ差下サルニ付持氏ハ武州
高安寺ニ陳取テ防戦セシカ不叶相州海老名ニ陣ヲ督
ヲ猶軍兵ヲ催促ニ付有親父子其弱ヲ捨ニ事武士ノ
本意ニ非ト父子合テ十二騎雜兵八十余人持氏陣ニ加
タリ扱上方勢豆州ヲ經テ相州四郡へ攻入由持氏ノ
陣所ニ聞ヘシカハ上杉陸奥守憲直ヲ大将トシテ二階堂
一黨徳川父子海老名上野介完戸備前守千百五十騎差向
此輩九月廿七日相州早川尻ニ着シテ軍評定ノ時徳川

有親進出曰小勢ヲ以大敵ニ當リ難シト云レ不戦シテ可
勝道ナシ混スヲ討死ト定ムルヘシ但小勢ヲ餘多ニ分ケハ
所々ニ押隔ラレテ墓々布軍モセス大死セント存レハ唯
一手ニ組合セ敵陣ヲ蒐破ニ敵敗走セハ進討スヘシ
敵強シテ不破ハ速ニ討死セント申ケレハ皆此儀ニ同
シテ扱戦ニ成シカハ各乗馬ハ肝強ニ蒐破馳戻右往
左往ニ當テカ戦ス故ニ此輩皆敷ケ所手ヲ負タリ
有親父子飽迄力戦シテ其場ヨリ鎌倉へ落行持氏
ノ子息義久以下ヲ守護シタリ方々ノ防戦禦拒相敗

ケレハ寄手鎌倉へ亂入ス今ハ御所可防武士等散々ニ
ナレハ徳川父子早川尻ヨリ来テ義久ヲ守護セシカ今
ハ不叶処ナリト父子并家子十八人一方ヲ討破義久
ヲ伴ヒ扇カ谷へ落行タリ寄手早散火ニテ御所
灰燼ト成ヲ以焼死ノ骸ヲ點檢セシカ正義久ノ屍不
相見ハ生捕正ヲ推問ニ及シカハ徳川父子其外付副
扇カ谷ノ方へ落玉フト申ヲ以追カケ可討取ト七十
余騎搦ニテ馳向義久歩行ニテ墓不行ヤカテ扇井
ノ辺ニテ追付タリ此所ニテ徳川父子ヲ始付随フ輩

其從兵追躡止リ防戦義久ヲ落サント働シカトモ十月
朔日ノ夜ナレハ闇フシテ敵味方見ハ分タス終ニ九騎ニ
被討成父子ニモ足助兵庫ニモ薄手多負ナカラ辛キ
命ヲ全シテ各思々ニ落散義久ハ生捕トナル徳川父
子ハ本國上州徳川ニ皈リ暫蟄居ニテ世ノ有彩ヲ窺
居タル處ニ持氏父子既ニ生害アリ然後ハ關東ハ皆京
都將軍ノ下知ニ應ニ管領上杉安房守憲實威勢
益盛ヲ大名渠ニ多諂ヲ斯ヨリ關東制法新ニシテ
政務ノ事嚴重ナリ大名ハ普ク將軍へ皈伏ニ相殘ル

輩ハ或ハ討レ或ハ自滅ニタリト云レ其殘黨猶東國ニ
多カラシク中ニモ新田ノ一族ニ於テハ搜求根ヲ斷葉ヲ可
枯ト下知有シカハ有親父子徳川ニ安堵成難ク永亨十
一年三月上旬父子ニハ潜ニ徳川ヲ遁出彼方此方流浪
シテ半年計ノ後猶行先ノ迫ヲ以相州藤沢道場清
淨光寺ニ入テ剃髮シテ時衆ノ僧トナリ有親ハ長阿弥
息親氏ハ徳阿弥ト号ス然後東國ノ住居叶ヒ難ク信州
ニ赴ク爰ニ小笠原清宗ノ三男林藤助光政ニハ持氏
在世ノ時數年近習ノ勤侍者ナリシカ諛者ノ口ニ罹リ

被没収浪々シテ名字ヲ林ニ改信州ノ山家ニ蟄居ス
有親在鎌倉ノ時睦馴ナレハ極月未渠ヲ尋到藤助
大ニ悦是ヲ饗セント欲レレ一物ナシ自ラ雪搔分ケテ
狩シテ兔一匹ヲ得タリ翌朝ハ永亨十二年庚申元旦
ナリ有親父子へ雜煮ヲ呈シテ且兔ノ吸物ヲ進ム是
ヨリシテ兔ノ吸物ヲ徳川家ノ嘉例トス其年中程迄
藤助力許ニ月日ヲ被送同年六月父子信州ヲ去テ
三州ニ赴キ坂井ノ郷民家ヲ借テ一兩年ヲ送ル然ルニ
嘉吉二年壬戌十月有親卒ス四十五歳ナリ息親氏

廿四歳ニテ其地ニ住ス其所ノ庄官五郎左衛門富リト
イヘ氏女子唯一人ヲ持ツ親氏ヲ智ニセント談ス故ニ
其家ニ移リ其年ノ暮ニ家ヲ繼翌三年ノ十二月一
子生ル是ヲ酒井五郎ト号ス 一説徳太
郎ト言 妻女ハ産後ニ
卒ス親氏はヨリ鰥タリ然ニ同國松平郷ニ太郎左衛門
ト云富家ノ庄官アリ近里ニ名高ニ渠モ女子一人
ノミ也智ヲ入ヘキ沙汰モナク娘既ニ廿五歳ニ及或時
親氏ヲ饗シテ還俗有テ智ト成家督セラルヘシト望
親氏諾シテ此時還俗シテ其家ニ移ル故ニ太郎左衛門

隠居ニ家督ヲ讓ヲ以テ是ヨリ松平太郎左衛門親氏
ト名乗坂井ノ郷ノ家督ヲハ先腹ノ子五郎ニ讓リ是
ヨリ酒井ノ字ヲ改称セシメ当家ノ家長タラシム太郎
左衛門カ娘ノ腹ノ子ヲ以松平ノ家督トシ惣領ニ定ラル
其相續ノ男子恭親也恭親智勇ニシテ然モ仁慈ノ氣
質ナレハ松平ノ親族ニ親ニ近村ノ者氏ヲハ養育シテ
縁ヲ結ハセ因馴ヲ以一族縁座敷ニ及フ去永亨十一
年ヨリ嘉吉文安宝徳亨徳康正長祿寛正文正迄
都テ廿八年ノ間ハ諸國一統ニ擾亂シテ強キハ弱ヲ

セタケ大名ハ小名ヲ掠ノ代官ハ地頭ヲ害シ庄官郷
民一揆シテ守護人ヲ追捕シ其所領ヲ奪取ル是等
ノ事ヲ親氏見及一族縁座ノ外ニモ親キ輩ヲ招キ
當時ノ模様ヲ語り手ヲ廣メ各ニモ所領ヲ附與セント
云ニ一座一同ニ可然ト領掌ニ付其人数ヲ催シ近郷へ
追掛從フ者ヲハ味方トナシ不從者ヲハ誅伐ス斯シテ
勢大ニ成三州ノ内岩津竹谷形原大給御油深溝野見
岡崎辺迄大略切從タリ嫡子二郎泰親若年ト云トモ
驍勇ニシテ先登ニ每度武功ヲ顯ニ斬取ニカハ皆親氏

ノ下知ニ應ス

爰ニ三州管沼ノ領主土岐新三郎定直ニハ親氏ニ不
雌伏渠當國任居ノ事去正長元年ニ南方ノ小倉殿
謀反ヲ企テ潛ニ嵯峨ヲ逃出勢州ニ赴テ彼國ノ國司
北畠家ヲ頼テ合戦セリ其頃^頃三州ノ任人管沼信濃守
俊治ニハ將軍義量郷ヲ恨ル事有ニヨツテ小倉殿ニ與
カシテ素懐ヲ達セントセシ処ニ小倉殿御和睦ニテ再
嵯峨へ還ラセ玉ハ管沼モ亦三州へ皈シカレ斯テ
何迄有ント國民等ヲ銜ヒ一揆ヲ企テ近境ヲ犯シ

奪ノ三州ノ早馬京都ニ馳セ事ヲ告シカハ是ヲ可誅
伐ト土岐大膳大夫興安并富永伯耆守久氏土岐孫太郎
頼房舎弟新二郎光貞土岐新三郎定直等興安ニ
隨ヒ永亨六年甲寅二月廿四日三州管沼ニ赴相戦フ
土岐定直搦手ニ向テ自ラ軍功ヲ勵シ頓テ信濃守ヲ
討取り其首ヲ得タリ信濃守カ弟管沼新太郎俊栄
ハ將軍ノ近仕ニテ上方ニ居テ兄ノ逆意ニ不與弥忠
儀ヲ盡ヲ以厚免ヲ蒙リ猶近仕ス土岐定直今度ノ
軍忠他ニ抽タリト管沼ノ所領ヲ賜リ土岐ノ名字ヲ

改管沼新三郎ト名乗タリ然ニ今度親氏ノ下知ニ應セ
サレハ長祿二年戊寅四月六日嫡子泰親ヲ大将トシテ
管沼ニ押寄攻戦ノ定直防戦スレヒ一晝夜稠攻ラレ
力盡降ヲ乞旗下トナル是ヨリ其子左近定吉其子新
八郎定鎮其子新八郎貞俊其子織部正定如其子
織部正定盈迄代々徳川家ノ家人ナリ又信州ノ林
藤助ハ親氏三州ニ秀玉フト聞傳康正二年丙子五月
十日三州ハ尋来奉仕ニ子孫家人ナリ親氏ニハ三州
大略切隨ヘテ應仁元年丁亥四月廿日逝ス芳樹院俊山

德翁禪定門ト号ニ高月院ニ葬ル親氏死去ニ付子息
恭親家督ニテ頓テ松平太郎左衛門ト号ニ武威ヲ國中
ニ振フ其頃閑院大納言實熙參州ニ謫居ニ玉フ旁申悦
ヲ以飯浴ノ後是ヲ執奏ニ參州目代トナシ從五位下參河守
ニ口宣被成下是ヨリ國中弥下知ニ隨フ頓テ當國岩津
ニ新城ヲ築ニ男和泉守信光ヲ入置岡崎ニモ城ヲ構テ
恭親是ニ移住ス此時庶兄酒井五郎親清ノ嫡子同
小五郎氏忠後左衛門
入道淨賢ニ男酒井與四郎親重父子三人
先陣ヲ勤ム此恭親ニ六子アリ嫡松平太郎左衛門信廣

是ニ松平郷ヲ讓リニ男徳川和泉守信光是ヲ家督トス
三八遠江守益親四ハ出雲守家久五ハ筑前守家弘六
ハ備中守久親也恭親ハ文明四年壬辰九月廿三日ニ
卒或永亨
二年正云良祥院秀岸祐金大禪定門ト号ス此時代ニ
豊後ノ任人本多八郎助秀ノ七代本多八郎正時同
助時兄弟三州ニ居住セシカ恭親ノ武勇ヲ感ニ其
手ハ屬ニ軍功ヲ顯シ御家人トナル正時ハ佐渡守正信
五代ノ祖作左衛門重次ニハ四代ノ祖縫殿頭康俊ニハ
七代ノ祖ナリ助時カ子平八郎助豊ハ中務太輔忠勝カ

曾祖父ナリ泰親死去ニ付二男和泉守信光家督シテ
岩津ノ城ニ居ニ岡崎城ヲ保タリ信光武勇秀タル故也
依テ國侍ノ心ヲ一ツニセシメ歎ノ氣ヲ奪ニ為ト謀ヲ搆
織田方ノ持城安祥ヲ棄取ト其西野ニテ躍ヲ調城
兵ヲ賺シ出シ大隙手ニ入是文明十一年己亥七月十五
日ノ夜ナリ安祥落シカハ西三河三分一ハ手ニ入タリ
長亨二年戊申七月廿二日卒ス崇岳院月堂信光禪
定門ト号ス遺言ニ付岩津村ニテ葬淨土寺ヲ建立
ニ信光明寺ト唱フ信光ニ男女四十八子有嫡子ハ竹谷

ノ松平左京亮守家はハ岡崎ノ城守タリ後号和泉
守今ノ松平玄蕃
頭カ元祖ナリ二徳川二郎三郎親忠岩津ノ城主トシ
テ家督タリ後修理亮又改右京亮三男松平三郎昌龍
四形原松平佐渡守與嗣今松平紀伊
守元祖ナリ五岡崎松平大膳亮
光重後改紀伊守當時水戸家中松平
壹岐守志摩守元祖六松平八郎右衛門
光英七八御油深溝ノ先祖松平弥三郎元芳八ノ野見ノ
松平次郎右衛門光親當時松平丹後守
同大隅守等先祖九美作守家勝十
松平修理亮親正等也庶子ノ分大概國中ノ武士ハ
送り駕トシ娶リ養子トシテ一族縁坐余多ニ及ヘリ

右京亮親忠家督シテ父ニ續テ村里ヲ伐取事多シ其
頃三州ニ小山下野権守政康ト云者野州ヨリ来住シテ
小河ノ城ニ居ス此所織田家ノ持分ナリ渠カ先祖源
家ノ石川武藏権守義基ノ後胤ニテ所縁ヲ以小山ト
稱シ来リシカ本姓ニ復其三子等相共ニ康親ニ奉仕シ
御家人トナル親忠一族郎等國人ヲ率シ延徳元年
己酉二月廿日井田郷ニ出張ス是當正月七日京都
將軍義政公薨去ニ付天下物恣ノ節ナリ尾州ノ織
田信秀ト此所ニテ終日戦テ終ニ討勝ヲ以敵敗北ニ

多討レタリ明應六年丁巳十月廿日隱居ニ剃髮ニ
テ西忠ト号ス子息九人嫡子ハ岩津太郎親長岩津
ヲ領ス二ハ松平源二郎兼元大給家之祖也三ハ徳川
二郎三郎長親此人ヲ家督トス四ハ松平弥八郎親房
後改玄蕃允五超譽上人智恩院ノ住持ナリ六松平
刑部丞親光七安祥左馬助長家八松平助十郎張忠
後改右京亮岩津ノ内衆トナル九松平加賀右衛門
兼清瀧脇ヲ領ス此時榊原七郎右衛門長清始テ
家臣ト成渠ハ仁木義長胤流ニテ勢州一志郡ニ

住シ始ハ孫十郎ト云三州來住ノ者ナリ

長親ハ父親忠隱居入道セシニ付家督ヲ繼安祥城

ニ任ス始ハ二郎三郎忠次ト名乗シカ藏人丞長親ニ改

又出雲守ニ任ス父祖ニ續テ武威逞其上寛仁ノ生質ナ

レハ國民ヲ能撫育セシカハ西三河ノ人十六人ノ外ニ高山

三郎左衛門忠正遠山左衛門尉景前等ノ類旌下ト

成故ニ其他遠境ニ及シ輩モ不招ニ來服依之駿遠ノ守

護今川氏親三州モ大概幕下ノ処各徳川家ニ降参セ

シ事ヲ驚北条新九郎長氏ヲ大将トシテ一萬ノ兵ヲ

添差向ル故ニ長氏文龜元年辛酉九月西三河ニ馳向

吉田ニテ勢揃シテ岡崎ノ城ヲ岩津ノ城襲攻當城ニハ

長親ノ舎兄岩津太郎親長篁居テ防戦此事安祥ハ

聞ヘケレハ長親入道道閔是ヲ可見弁ニアラスト子息

一族家臣ヲ催シ彼是子三十余兵ヲ以テ横ヲ入攻

討シカハ長氏力下知モ不用崩立テ敗北ス故ニ衆勢是

ニ被引立曹山迄敗走スレハ追討シテ首ヲ取事余多

ナリ石川本多榊原大久保林等ノ家臣粉骨高名ス

此大久保和泉守忠政ノ父大久保和泉守忠繁力本

國ノ野州ニテ代々那須与一カ長臣ニシテ彼家隨一ノ
者ナリシカ忠政代ニ及テ那須ヲ恨子細有テ教代ノ
所領大久保ヲ弃テ三州へ來居セシカ器量有ヲ以郷
村ヲ伐取テ武威ヲ振シカ長親ニ屬シ長ク家臣ト成
忠政カ子ヲ五郎右衛門忠勝ト云子孫數多分流ス此
岩津合戦ノ手際ヲ見テ田原ノ城主戸田彈正左衛門
宗光ニハ教代ノ今川ノ旌下ヲ離レ長親ニ屬シタリ
相長親ニハ親父西忠存生ノ内ニ自分モ入道ニ道闕
ト号シ家督ヲハ嫡子二郎三郎信忠ニ譲リ二男

三郎二郎親盛ニハ福釜三男與市信定ニハ櫻井郷四男
甚太郎義春ニ青柳郷五男彦四郎利長藤井郷ヲ讓
與ノ文龜二年壬戌九月ニハ政道共ニ信忠ニ任セタリ叔
明應九年八月十日ニハ親忠入道西忠卒去在世ニ建立ノ
大樹寺ニ可葬由遺言ニ付此処へ送り松安院大胤西忠
大居士ト謚ニタリ親忠入道卒去ニ付長親入道ヨリ大樹寺
法度ノ條々被出ニ付當國ニテ旌下タル縁坐ノ輩各令連判

禁制

一 於當寺中狼藉之事

一竹木伐取之事

一對衆僧致非義之事

右於背此旨輩者可處罪科候當寺之事西忠為江
牌所上者自然國如何様之儀出來候共為彼人屢
可被致警固者也仍如件

文龜元年辛酉

德川二郎三郎

八月十六日

國衆十六人名在判

長親在判

形原左近將監貞光

丸根美作守家勝

田原孫次郎家光

上野左衛門太夫親堅

岩津源吾光則

岩津大膳入道常蓮

岩津弥九郎長勝

岩津弥四郎信守

岩津八郎五郎親勝

岡崎左馬允親貞

長沢七郎親清

牧内右京進忠喬

竹谷弥七郎秀信

岡崎六郎公親

細川次郎親世

岩津源三算則

信忠徳川二郎三郎ト号ス左近藏人ニ改ム父長親入道
道閔ヨリ文亀二年ニ實ニ家督ヲ受取大永二年_{壬午}
迄家務ヲ取事廿一年也其志無道ナレハ累代家人ヲ
疎ニ一族縁坐モ離別ノ人多父祖ヨリ附隨ヒニ尾州

駿州ノ輿力ノ國人皆本主ノ方ヘ皈降シケレハ安祥
ノ預人安祥左馬助長家モ今川家ニ心ヲ通其城ヲ
不返漸今ハ岡崎一城ヲ守レリ依之家臣等ノ心區々
ニシテ信忠ヲ捨テ信定ヲ主君ニセント云輩アリ酒井
本多大久保石川等曰信忠無道也トテ廢子ニ取替シ
事有ニヤ幸幼息十三歳ナレハ此人ヲ家督ニ立テ
信忠ヲ隱居セシメント密談シテ大永二年押テ信忠
ヲ大濱ヘ移シ隱居セシメ幼息ヲ家督ニ立ル是清康
ナリ信忠大ニ憤トイハ臣如何トモ仕難ク是非ナシ

此時近山中ノ兩城ヲハ松平彈正左衛門昌安心督シテ
奪取テ信忠ニ敵對シタリ今度清康家督ニ付舎弟
松平藏人信孝ニハ三ツ木械郷同弟十郎三郎康孝ニハ
見須ノ郷ヲ割授タリ信忠隱居ノ後享祿四年辛卯
七月廿七日卒去ナリ大樹寺ニ葬安栖院泰孝道忠
居士ト号ス

清康十三歳ニテ家督ヲ繼号世良田二郎三郎家臣
ノ計ニヨリテ也若年ト云氏寛仁英才雄略也故ニ皆人
因カシツキケレハ信忠ノ時相叛輩皆皈降シタリ既ニ

十五歳ノ時大久保忠勝カ勸ニ付テ大永四年五月
廿八日ノ夜風雨烈シキヲ幸ニ偷人ヲ以彈正左衛門
昌安カ山中城ニ忍ハセ内外ヨリ是ヲ攻立首七十三
ヲ討取忽城ヲ棄取シカハ清康此勢ニ乘テ岡崎ヲモ
棄取シト翌十六日押寄急ニ攻付タリ昌安自討出命
ヲ限ニ防シカトモ山中ノ落人共モ落来リ居リシカ是
等カ億病ニ引レテ城兵墓々布不働ハ昌安今ハ不叶
降ヲ乞其娘ヲ清康ノ妻ニ進セ岡崎ノ城ヲ渡シ斯響ニ
仍テ西三河大半清康ノ手ニ属シタリ

又前文段ニ長親ノ代ニ岡崎ノ城ニ八岡崎彈正左衛門
昌安居住是モ一族タリシカ長親カ聳ニ取テ男子十
ケレハ城ヲ長親ニ讓ル是ヨリ安祥岡崎ノ西城主ト成
テ武威益盛ナリト云云此本文ニ今亦如此又信忠無
道ニ付從臣屬士相叛安祥ヲ預人ノ安祥左馬助モ
安祥ノ城ヲ以今川家へ降リシカハ信忠ニハ漸岡崎一城
ノミ持テリト云テ今岡崎山中西城清康ノ手ニ入ト
云ハ信忠ヨリ清康家督ノ在城ハ何方ソ文中始終
ノ首尾不調昌安カ信忠へ叛タリトテ岡崎ノ城ヲ又
取返ニ相籠居タリトモ不相聞惣ノ三川記ト云御
先祖ノ来由ヲ書記セシ書史皆先後ノ首尾不調著述
ノ輩不穿鑿ナリ能々吟味スヘシ

昌安ノ娘甚嫉妬ニシテ仕女ヲ害ス翌年正月離別也

是ヲ恨慕ヒ不再嫁尼ト成テ玄能ト法号ス同年大

五乙酉九月江州ノ住人青木筑後守貞景カ娘ヲ清康

娶リ翌六年丙戌四月廿九日仙千代丸出生是廣忠

ナリ清康十七歳ノ時ナリ其青木カ女ハ産後ノ病ニテ

卒ス其後官善七秀成カ娘ヲ迎テル是ハ荊屋ノ城主

水野右衛門太夫忠政カ妻ニテ忠政死テ孀タリ容儀

ノ麗ヲ以娶レリト此女水野カ方ニテ産タル女子一人

ヲ伴ヒ来後等廣忠ノ妻ト成ル故ニ行逢兄弟ナリ

傳通院殿ナリ

清康ノ一族幕下松平大炊助忠定ハ大炊助忠景カ
子ニテ三州額田郡ノ岩津ニ居住シ小美村ノ城主トシ
テ同國ノ米津四郎右衛門ト云織田方與力ノ士ト數
年挑戰シカ大永三年癸未私ノ軍士ヲ以テ戰テ
雌伏セシメ其領地ヲ攻取又保母村ヲモ攻取知行トス
此時迄深溝ノ城ニ大場主膳正ト言敵有テ威ヲ近郷
ニ振テ忠定是ヘモ私トシテ押寄終日戰フ故ニ主膳正
防戰ノ術ヲ失テ城ヲ弃去是ヨリ忠定深溝ニ居住ス
清康岡崎城ヲ攻玉フ時モ忠定嫡子好景氏ニ相從テ

軍功ス其好景カ子主殿助家忠ナリ段々相續ス
尾州岩崎野呂兩城ハ織田家ノ持城ナリ享祿三年庚
寅五月八日清康西三河ノ軍兵七千ヲ率シテ尾州ヘ
出張ニ偷人ヲ兼テ岩崎ノ城ニ入置火ヲ放セ内外ヨリ
攻立ル城主荒川新八頼宗防戰不叶討死シ城忽陥タリ
夫ヨリ野呂ノ城ヘ押寄攻口一所計不攻堀ヲ渡構ヲ破
リ平攻トス城主坂井彦右衛門突出戰ヒシカ軍兵多
討セ城ニ立飯腹切テ死タリ依之當城ニハ櫻井ノ松平
内膳正信定カ軍士ヲ入置玉フ清康廿一歳ノ時ナリ

夫ヨリ宇理ノ城へ押向叔父松平右京亮親盛同内膳正
信定ニ四千ノ兵ヲ添大手へ向シノ自三千ノ兵ヲ率シ
搦手ニ被攻城主熊谷備中守直盛三百余兵ヲ従へ
城中ヨリ突出防戦ハ内膳正敗走ス右京亮下知シテ
踏止リ戦テ討死ス然モ内膳可救ト逃去清康進テ
戦城門ヲ攻敗ル故ニ城主直盛不叶城ヲ棄テ逃去
城ハ手ニ入タリ時ニ討取首三百七十余ニシテ味方ニモ
九十余人討死此外手負余多ナリ此直盛ハ江州ノ
熊谷ニテ直實ノ後胤ナリ清康右ノ外小城共余多

攻拔ハ西三河ノ輦大略味方ニ属ス時享祿四年辛酉
七月廿七日隱居信忠卒ス故ニ暫軍ヲ被止翌天文元
年壬酉四月吉田ノ城ヲ攻ント同十六日出陣ニ赤坂陣
取タリ吉田城主牧野田三兄弟評シテ曰東三河ハ今川
織田ノ西家ニ属ス西三河ハ清康ト某兩人ノ領域也
故ニ岡崎攻取ント志処ニ今清康遠當城へ押寄事
幸ナリ途中ニ馳向雌雄ヲ決セント兄弟千余兵ヲ率
シ城ニハ老兵ニ足輕共ヲ添七十余人ノミヲ残シ城ヲ打
出ル故敵味方入乱突戦スレハ牧野兄弟四人トモ討死

シ残兵等ハ吉田ノ城へ引入故ニ是ヨリ吉田ノ城へ押
寄攻ラル、ニ皆防ニ不及逃去ハ城ハ手ニ入ヲ以清康
當城ニ入テ暫休息シ夫ヨリ田原ノ城ニ押向城主戸田
彈正父子長親ノ代ニハ旌下成シカ信忠ノ代ニ相叛シカ
堪カ子再降叅ス夫ヨリ吉田ノ城へ飯リ十余日逗留ノ
内ニ牛窪牧野新二郎貞成設樂ノ設樂甚三郎貞光
西郷ノ西郷新太郎二連木ノ戸田丹波守康長伊奈ノ
本多平八康重駄ノ山領野田ノ菅沼新八定盈其外山家
三方作手長間西郷ノ輩長親ノ旌下成シカ信忠ノ代ニ

叛今川織田ニ與カシテ徳川家ニ敵セシ輩吉田へ来耻
ヲ謝シテ降ヲ乞属スレハ西三河ハ悉手ニ入タリ故ニ所々
ノ仕置ヲ下知シテ守護ヲ置テ守セ岡崎へ飯陣ナリ
清康猛威近國ニ聞ヘケレハ甲州ノ武田大膳太夫信虎
年頃徳川家ト所領ノ争折々軍ニ及ヲ以如何思ケン
金丸伊賀守藤次カ嫡子若狭守虎嗣ヲ使トシテ岡崎ニ
送り自今新ニ交厚シ互ニ大事ノ軍ニハ合カスヘシトナリ
清康是國嶮易風俗等近見窺ニ為ノ謀ト察ニ態ト
應揚ニ使者ヲ城中ニ呼入對面ニ仰ノ通ニ向後疎意

有ニシト返答ニテ被返

又尾州森山ノ城主ヲ始織田家持ノ小城ニ清康ハ密
通ニ濃州ノ國人等數十人ヲ街ニ清康ノ味方トナシ
尾州へ出張有ラ合カセント申送ヲ以清康一萬余ヲ
率シ天文四年乙未十二月四日尾州へ向テ岩崎ニ陣シ
信秀ヲ偽引出サント処々放火シテ翌五日ニハ森山ノ
城ニ陣取シカハ信秀未出向処ニ叔父櫻井内膳逆心ヲ企
テ今度催促ニ不應虛病ヲ構テ上野ノ城ニ相籠織田ハ密
通ニ清康ヲ亡シ其本領ヲ押領セント巧由相聞ケレハ頓テ

是ヲ攻亡ニト清康怒^怒玉ヲ酒井忠次大久保父子曰渠織田
ニ組スル由然ラハ御一族タル大給ノ親衆長澤ノ康忠
且小川ノ城主水野下野守等ハ内膳ノ智ナレハ加勢センモ
難計所詮敵國ノ長陣ハ失多候ハ軍ヲ班スニ不如ト
色々諷諫申ニ依テ明日引入ヘキニ定タリ翌朝陣中ノ
馬放レ馳廻各騷シカハ清康モ庭迄出テ下知ノ處へ
安倍弥七郎後ロヨリ切付弒タリ植村新六郎御刀ヲ
持居シカ是ヲ拔テ渠ヲハ仕留タリ弥七カ父大藏其罪
難遁死命ヲ賜ラント乞然ニ誤テノ儀其證據有ヲ以

此上ハ祖父道闕ノ仰ニ可任ト衆儀一決ス敵方ニハ此様
子ヲ聞テ時ヲ得タリト一揆ヲ発シ岡崎勢ヲ籠シカ
味方ノ兵士心ヲ一ニシテ其死骸ヲ取圍一揆等ヲ追拂
三州へ引入大樹寺ニ葬善徳院年叟道甫居士ト謚
同七日ニハ諸士思々ニ岡崎へ皈タリ野伏等蜂起シテ
道スカラ襲ケレハ皆間道ヲ求漸在所へ著タリ石川
四郎安陪四郎五郎等十日ノ暮方ニ今橋迄著タリ
清康横死ニ付子息仙千代六歳成テ譜代ノ輩取立
ントス此時ヲ得織田信秀岡崎ヲ攻取ント同五年丙申

二月初八千余兵ニテ三州へ打入テ大樹寺面ニ陣取レハ
仙千代幼サナレハ名代トシテ清康ノ舍弟松平藏人信孝
同弟十郎三郎康孝大将トシテ八百余兵伊田ノ郷迄
出テ陣ヲ張必死ノ覚悟ニテ戦ハ尾張勢不堪一戦
利ヲ失本國へ逃皈ル味方へ討取首百六十余級ナリ
味方ニモ本多吉右衛門忠豊 中務忠勝祖父 林藤藏植村新藏
高力左近同息平三郎ヲ随一トシテ四十余人討取ラレ
シカ仙千代殿代ノ物始ヨシト悦タリ叔長親入道ノ仰ニ
弥七カ逆上ハ率尔ニシテ懷中ニ大藏カ陳謝ノ状起請

文アレハ大藏ヲ厚免有テ不相替忠節可仕ト仙千代殿へ
被附タリ

櫻井内膳正ハ前ヨリ織田ニ通シテ謀叛シ西三河ヲ奪
取ラント度々織田家ノ加勢ヲ待^得テ岡崎勢ト戦シカトモ
勝利無ヲ以今度思案ヲ廻シ自分ノ父ノ道闍ハ曾孫
仙千代ノ後見沙汰セルヲ訛賺仙千代ト和睦シテ後見可
仕以前ノ罪ヲ御免可有ト願ヘリ始ハ承諾無リシカ流
石ノ恩愛ニ迷藏人信孝ヲ招是如何可有ト相談也
藏人心ニ不叶ト云凡今其後見トシテ萬事ヲ預司ヲ

以無用ト申サハ後見ヲ争フ心ト被思事モ耻シク免
モ角モトノ返答ニ付夫ヨリ内膳後見ニ居シカハ一族家
臣皆下知ヲ守偏ニ家人ノ如ナレハ信定権威ニ募ヲ以
仙千代ヲ害シ岡崎ヲ取ントユ夫ス此企ヲ安陪大藏聞
出シ爰ニ其終在ニハ危シト思同七年戊戌三月中旬
潜ニ仙千代殿ヲ伴ヒ勢州神戸へ奔走シ東條持廣ノ
家ニ入テ憑居タリ此人ハ清康ノ妹婿ナレハ十リ
持廣夫婦爰子ノ如シ頓テ元服ヒシメ徳川二郎三郎
廣忠ト名乗シム翌八年己亥ノ暮^春カ及テ大藏一人

駿府ニ下向シ今川上總介義元家臣朝比奈駿河守
氏秀ニ便テ委細ヲ義元ニ申達シ向後今川ノ幕下夕
ラシメテ御助カラ以櫻井ノ信定ヲ討テ本領安堵ニ於ハ
織田ノ領國へ御先手仕是ヲ攻取御手ヲ廣セントシ
義元最ト許諾ニ付大藏悦テ勢州ニ飯持廣へ申談ニ用
意シテ同亥ノ二月十七日神戸ヨリ乗船セシメ遠州掛塚迄
着シ鍛冶カ許ニ止宿ス安陪四郎兵衛忠定是迄出迎夫
ヨリ舊臣段々參上申此上味方ヲ催ス其始ヨリ四郎兵衛
馳廻テ鶴殿十郎三郎康孝ノ隨一ノ臣石川藤十郎内藤

甚太郎ヲ憑ヲ以兩人内證申ニ依テ最初ヨリ康孝味方ト
ナリ同弟松平藏人信孝モ共ニ心ヲ通ス康孝ニ大上様ト
称スル母儀ヲ此動亂ノ前ヨリ人質トシテ出置シカ弥ニ心
ナキ処ナリ最初ヨリ松平傳十郎信勝ハ參リテ味方ノ才覺
ヲ廻シ松平善一郎本多猿千代坂井又十郎皆心ヲ通阿部
甚五郎正宣藤井ノ彦四郎利長モ味方トナレハ林藤助
正縁カモ覺ニテ松平弥十郎中山勘左衛門築田平三郎同
平九郎モ同心ニ信定ノ誥衆ト称シタル大久保新八成瀬
藤藏同又太郎大賀孫四郎モ銜レタリ又安陪八郎五郎

天野清右衛門植村新三郎河井隼人同半次郎中間六左
衛門孫五郎八郎五郎等モ四郎兵衛カ詞ニ同心ス斯味方
ヲ相催ス其内ハ彼鍛冶カ方ニ廣忠ハ御入ナリ扱味方余
程ニ及シカモ信定ニハ道閔ノ三男ニテ其氣色ヲ取ヲ
以道閔ノ心ヲ傾ケ難シ其上内膳事織田信秀ノ妹婿
ナレハ威勢強ク徳川一族衆モ譜代ノ輩モ皆輕薄スレハ
今更急ニ如何共仕難シ今川義元朝夕ニ近付其心根
ヲ被窺ニ勇健ナリトテ三州茂呂城ハ年頃義元ノ持
城成ルヲ廣忠ニ進ラセ是工移ニ追テ岡崎ヲ攻ヘシト

同十年ノ七月是へ移玉ヲ扱義元ニハ試ニ廣忠ヲ大將
トシテ同國吉良ノ城ヲ令攻城主荒川甲斐守頼時清康
死後今川ノ手ヲ離レ織田家ニ與カスル故ナリ荒川防戦
不叶降ヲ乞廣忠是ヲ免シ今川ノ手ニ屬テ渠ヲ先手
トシテ同國吉田ノ城ニ押寄取圍攻動ス
櫻井信定ニハ岡崎ノ士共違心有シテ氣遣先近所ニ
召仕フ者ナレハ大久保新八忠利兄弟并八國甚六詮重
林藤助政縁大原左近右衛門惟宗成瀬八郎正乘等ヲ
井田郷ノ八幡社壇ノ前ニテ起請血判セシム斯誓紙

スレハ此輩ヲ真實ト思ヒ櫻井ノ居所へ飯ル右ノ輩
其誓紙ヲ捨テ廣忠還住ノ事ヲ計ル藏人信孝ニハ
吾道閔ノ在居ノ岡崎信定モ伯父ナレハ當城ニ在ナカラ
是ヲ其分ニ渡サシモ道閔ノ思居ノ憚アリ折節病氣ナ
レハ是ヲ幸ニト湯治セシ其留守ノ隙ヲ以城ヲ可拔取ト
城門ノ鑰共ヲ右ノ六人へ渡シ勢海へ赴タリ此時大久
保新八同七郎右衛門同次右衛門同權右衛門成瀬八國
林大原等城中ニ居住シテ本丸ノ留守居番ハ石川
長右衛門康利同弟三郎四郎康定

石川修理亮康長二男三男
ナリ同四郎康繁ノ弟ナリ

其外兵士十余人守居処へ城中一味ノ輩本丸へ夜討
シテ急乗取ハ安陪四郎兵衛定輕余多引具ニ念志原
迄御迎トシテ出向天野力人質又太郎并松平傳十郎
三人相伴櫻井ノ寺迄参リ同六月朔日ノ朝廣忠岡崎
ニ飯城成テ各悦ノ眉ヲ閔彼夜討ノ時本丸ノ番士
石川兄弟ハ討死ス其余ハ疾ヲ蒙リ逃去タリ廣忠
十七歳ニテ本主ニ立戻リ内膳事大悪ナレハ可被誅由
ノ処曾祖道閔アナカキニ佗玉へハ無是非思免ナリ
是ヨリ藏人信孝後見ニ成テ政道ヲ取行ヒタリ

岡崎還任ノ事ヲ廣忠ヨリ石川四郎康繁ヲ使トシテ
義元へ被告ハ義元ヨリモ朝比奈小隼人ヲ使者トシテ
送り是ヲ賀シ次ニハ三州西条吉良左兵衛佐義昭其
弟東條ノ義安等以前ハ今川ノ旗下ノ処ニ近年織田
ニ組シ動モスレハ東三河ノ味方ト挑戦ハ是ヲ攻撃レヨ
今川人数ヲ差添ヘシトナリ依之廣忠大将トシテ千五百
兵先西條へ押寄レハ東條モ西條ト一ツ手ニ成テ終日挑
戦シカハ義昭ニハ深入シテ討死ス義安奮戦シカ不叶
敗北シテ東條ニ引籠ニヲ續テ押寄攻付レハ防戦盡テ

降参ヲ乞此旨義元へ窺玉ハ吉良朝ニハ味方トナリ夕
ニハ敵ト成其心不一決今其分ニシテ差置ハ又織田ニ被誘
敵トナラシ間義安ヲ擒ニシテ駿州へ差下スヘシト下知アハ
頓テ擒ニシテ被相送ケレハ藪田ニ押籠置義安カ居城
ハ吉良カ門族西條ノ義昭ヲ一説吉良義諦今川ノ関口刑部
少輔カ弟世ニ義昭ト書ス今川
ヨリ取立一向亂ノ後出奔城代トシテ入置渠ハ今川ノ味方トシテ變心
ヒス今度モ廣忠ノ手ニ屬大手ノ軍ニ戦功有ヲ以其
褒美トシテ如此此軍ハ天文十一年七月十九日也今川
義元遠州ヲハ悉討隨へ東三河ヲモ押領ス徳川廣忠

今ハ今川ノ旗下トシテ西三河モ相隨時ニ及シカハ此上西
三河ニ有処ノ織田方ノ持城ヲ悉攻隨エ夫ヨリ尾州へ討
入ント同十一年壬寅八月二日遠州ノ兵ニ東三河ノ人數
ヲ加二萬余ヲ差向ケ大手ノ大将ニ駿州臨濟寺ノ雪齋
和尚副將ニ朝比奈備中守恭能ナリ又搦手ハ朝比奈
小三郎恭秀ヲ左將トシ岡部五郎兵衛長教右將タリ
廣忠へモ示合スヲ以一族家人ヲ被催扱今川勢ハ今切本
坂へ出張シ勢ヲニツニ分テ岡部先陣ス則山中藤川ニ陣取
八日ニハ矢矧川ノ下ヲ渡上和田ニ押上リ陣取織田信秀ニハ

下殿ノ嫡男三郎五郎信廣舎弟津田孫三郎信光等ニ
四千余ヲ差添四日ニ清洲ヲ立テ笠寺鳴海ニ陣シ八日
ニ三州安祥ニ着陣シ上和田ノ砦ニ移リ十日ニ馬頭原ニ
押出シ備ヲ立ル信秀モ安祥迄着陣シ孫三郎軍將
トシテ小豆坂へ取上ントス今川勢先立テ當所へ出張
ス西陣間一里余ト云ヘ其間山路ナレハ先途見分難ク
小豆坂へ登所ニ尾張方ノ先陣行逢信秀ノ家臣織田
造酒之允信房左右ヲ下知シテ味方ノ小勢ヲ敵ニ見透力
サレヌ内ニ早坂ノ上へ押上テ合戦セヨト云処へ今川勢

先立テ坂へ押上関ヲ作菟下ニ戦フ信秀ノ舍弟與二郎
信康同四郎二郎信實同孫十郎信次兄弟其外赤川
彦右衛門神戸市左衛門等相勵ニ戦ニ付内藤藤助能
分捕ス川尻與四郎ハ伊奈某ト組テ首ヲ得ル時十六歳後肥
前守鎮吉ト云
永田四郎右衛門重宗名古屋弥五郎秀方以下討死武
藤三位入道小瀬修理太夫直澄川崎傳助友勝土肥左
衛門通平大久保半助業忠等能相戦此大久保度々勇
力ヲ顯ヲ以今樊噲ト異名ス此戦數刻ナレハ黄昏ニ及此
時今川ノ大将朝比奈小三郎泰秀一番ニ鎗ヲ合ス廣忠

ノ軍兵助勢トシテ先登ニ進左右ヲ討破ルヲ以織田信秀
敗北ニテ其兵三町余崩テ信秀ノ旗本ハ崩掛レ共ニ
引立被操立盗本迄引退此時津田孫三郎信光織田
造酒之允信房岡田助右衛門直教佐々隼人勝通同弟
孫助勝豊中野曾知此時十六歳後
又兵衛忠則ト云下方弥三郎匡範十六歳
後左近
ト此七人一度ニ返合鎗突立ル信光信房抽テ敵中へ入
テ働ハ残五人モ不劣ト同進テ働ハ今川方暫是ニ猶豫
ニテ進不得織田方是ニ力ヲ得テ備迄盛返敵ヲ
突立ル小豆坂ノ七本鎗ト云是ナリ依之今川勢敗北ト

見ヘシ処ニ廣忠ノ軍勢ノ中ヨリ林藤五郎小林源之助
以下横合ヨリ馳入テ突立戦タリ是ヲ見テ岡部長教
モ盛返戦ハ武藤三位ト今川ノ小倉與助正孝ト引
組三位討レタリ織田方小勢ナレハ終ニ利ヲ失ヒ上和田
ノ城ニ引入タリ安祥要害ニハ信廣ヲ残シ置信秀尾
州へ飯陣シ雪斎モ朝比奈モ暫三州ニ逗留シテ後
駿州へ飯旋ス

廣忠ニハ去年辛丑正月刈屋城主水野下野守信元カ
妹娘トシテ婚礼ナリ翌十一年壬午十二月廿六日若子誕

生竹千代ト名付是家康公ナリ同十三年甲辰三歳
ノ時御母儀離別金田惣八郎安陪四郎兵衛送リ申
水野怒テ其送輩ヲ殺ントス高木主水水野左近ニ
三百兵ヲ添差越ストイヘ彼女ノ仰ニテ早速立去リ
シカハ手ヲ空ス此女阿古屋ノ久松佐渡守定俊方へ
再嫁ナリ先腹ニ定俊カ嫡子アリ弥九郎定通ト云
アリ叔父次兵衛十郎左衛門ト不快ニ付殺害セラレ
家康公ト同腹ニテ三郎太郎康元後松平因幡守次
八源三郎康俊其次三郎四郎定勝後隱岐守
長福幼名

皆松平ノ姓ト成未ハ女子ニテ松平丹波守康長ノ妻ナリ
別腹ニモ女子アリ松平玄番允家清妻ナリ佐渡守カ父
ハ久松二郎左衛門定義ト云又佐渡守弟ニ久松助之丞
定重後民部少輔其子ヲ惣太郎忠次ト云後彦右衛門
御家へ後年被石出佐渡守末弟次兵衛義春其子孫
松平越中守ノ臣久松清左衛門先祖ナリ末々ノ弟十
郎左衛門吉次其子孫松平駿河守ノ臣久松八左衛門
先祖ナリ

家康公別腹ノ御弟家光元後康 御湯取腹ナリ十三歳

ヨリ不行歩ニ付浪々ナリ

慶長八年癸卯八月十四日卒
正元院傑傳宗英大居士ト号

御妹二人

アリ平原助之丞正次カ娘ノ腹ナリ吉良荒川甲斐守

頼持ノ妻此御妹ノ腹ノ女子

甲斐守
胤

酒井備後守忠利ニ

嫁ス讃岐守忠勝ヲ産ム宝鏡院ト云御妹ハ甲斐守

死別シテ市場殿ト言後年筒井玉殿定慶方へ再嫁ス

御中妹ハ長沢ノ松平源七郎康高ノ妻ナリ御季ノ妹ハ

櫻井與市忠正カ妻ニテ松平内膳家廣ヲ産與市カ

弟與二郎忠吉ニ再嫁シ松平安房守信吉松平左馬允

忠類二人ヲ産ム再後家トナリ後年保科彈正忠正直

方へ再々嫁ス

武田與カヲ離レ家康公ノ味方ト成ヲ以武田ヨリシテ
正直カ高遠ノ城ヲ攻テ其妻ヲ燒殺ス故ニ忠義ヲ以妻ニ賜

天文十四年乙巳三月廿日家臣岩松八弥不慮ニ廣忠ニ
疵付タリ植村新六渠カ逃行途中ニテ組藏人信孝
モ来掛リ是ヲ突殺ス此科ニテ渠カ子氏被害嫡孫
六藏^歳成ヲハ助命セシメ長袖ニセヨトノ仰ニテ幸若小八郎
カ舞ノ弟子ト成ニ幸若ト名乗シム後與太夫ト云其
子與三太夫御先祖ノ事御家人由緒迄能覺タル由
秀忠公ノ上聽ニ達ニ被召出語ラセ聞召御感ノ上

舞太夫御免ニテ御咄ノ衆ト被成法躰ニ真齋ト号
其子忠八郎モ舞太夫御免ナリ

廣忠岡崎還住以來ハ松平藏人信孝後見トシテ同
十郎三郎廣孝加テ政道之沙汰ニ安陪大藏正就酒
井雅樂助政親石川與七郎清兼 執事ノ如權ヲ

取雅樂助別ニテ出頭ナリ大久保新八成瀬八郎大原
左近右衛門林藤助續テ抽見ヘタリ酒井左衛門尉
忠次ハ一族ニシテ縁者ナレハ吾執權ニ可成者ノ処ニ
庶子家ノ雅樂助其職ヲ司テ渠等カ下知ヲ受ル事

奇怪ナリト同十五年丙午三月上旬大原左近右衛門
今村傳四郎等ヲ伴ヒ出テ大久保成瀬ヲ取次ニ三人
執權トシテ雅意ニ慕上ヲ蔑如シテ忠次如ニモ無礼也
傍輩等憤恨和順ノ輩ナシ雅樂助與七郎兩人ニ腹
切ラヒ御家ヲ治ノ亂ヲ鎮メント訶廣忠仰ニ少事ヲ
上テ害心ヲ狹事亂ノ基ナリ主君ノ爲ニアラス早
和睦ヒヨトノ事ナレハ是非ニ不及退出シテ夫ヨリ大
原今村ヲ銜ヒ三人共ニ逆心シ織田方タル上和田ノ
城主松平三左衛門忠倫ニ一味シテ岡崎へ敵對ス又

藏人信孝ニハ御一族岩戸殿死去シテ嗣子ナケレハ其
領可上処ヲ自分へ押領シ且又三州住人板倉八左衛門
頼重カ嫡子ハ右衛門好重頼重カ弟彈正重定同
弟三次郎重宗其子主水重茲彈正甥ニテ聲也又好重カ嫡
子左衛門忠重二男喜藏定重等ヲ銜ヒ家人
トス三男四郎右衛門勝重ハ相傳ノ主ヲ離レ傍輩
ノ家人ニ争テカ成ニト廣忠へ奉公ス此時十郎三郎モ
病死其幼子八郎三郎康定遺領ヲ賜相續ノ処ニ
是モ早世シテ斷絶スレハ其領モ藏人押領ス安部

大藏ハ當時ノ家長成シカ日頃藏人ト不快ニ付
八虐ノ弥七カ父タル者ヲ老中ト称シ侍ノ座上セシ
ムル事穢ナリト常々被申事ヲ聞テ憤思フ處ニ
藏人係ルニツノ押領ヲ申立酒井石川ト申談ニ謀
ヲ廻シ翌年年始トシテ今川義元へ礼病氣ニ付延引
ノ儀ヲ藏人ヲ以テ被仰入ヲ幸トシテ各心ヲ合セ
信孝ノ居宅ニツ本^本ノ館ヲ追捕其所帶ヲ没収家人
等追放ス藏人何故斯ト是ヲ糾サント三州ニ立飯
所ニ居所ニ代官ヲ被居不寄附ハ書状ヲ以テ訪詔

有ト云凡是ヲ取次人ナシ今ハ爲ヘキ様ナク駿州へ
又立越此事ヲ義元へ歎ヲ以今川ヨリ岡崎ノ老臣
等ヲ替々招寄ヒ信孝飯黍ノ事ヲ廣忠へ異見セヨ
トノ下知有トモ各藏人カ我意押領ノ訣ヲ申述シカハ
義元最ト諾シ其後訪詔ヲ取上無リケレハ藏人為方
ナク浪々シテ織田家へ属シ上ノ和田へ申通松平三左衛門
酒井左衛門ト談シ岡崎ヲ計ラントス藏人ノ家人内藤
甚三ノ儀信孝ノ本意ニ非ス岡崎ヲ計ントノ儀不義
ナリト思シカハ大久保甚四郎ヲ頼廣忠ノ方へ奏ル案ニ

藏人ノ子孫當時松平九郎左衛門忠利同與十郎重
利等ナリ

松平三左衛門忠倫上和田ニ在任ノ処ニ織田信秀大軍ヲ
差向安祥ノ城ヲ攻取嫡子信廣ヲ入置進テ佐崎ノ構
ヲ攻ントス忠倫大ニ恐信秀ノ味方ト成却テ岡崎ヲ
攻ント討渡理筒針ニ砦ヲ構人数ヲ入置信秀重テ
出張ノ為トテ上和田ニ砦ヲ築忠倫ヲ入置岡ノ城ニハ
藏人信孝ヲ入置上野ノ城ニハ酒井左衛門忠次ヲ
籠置岡崎ヲ一城ニシテ攻ント計ル其頃岡崎ノ士浅井

半六藏人ハ密通ニ何共ニテ廣忠ヲ害スハニ知行ノ折
紙可賜ト云藏人答テ廣忠ニ恨ナシ是ヲ害ス事ヲ不思
大藏ヲ害セハ折紙ヲ可出ト有シカニ大藏ヲ討ニ事不叶
歛其後沙汰ナシ此事年ヲ経テ相知レケレハ浅井ハ出奔ス
扨三左衛門左衛門牒合天文十六年九月廿八日大軍ヲ
率ニ岡ノ城ヨリ出テ渡理河原ニ陣ヲ取廣忠ニハ敵ニ
足ヲ溜サセナト小勢ト云ニ彼処ニ馳向戦敵大勢ナレハ
廣忠ニモ被圍危ノ砌御油ノ松平外記忠次同弟
喜藏信次鳥居源七元繁蹈止リ力戦ニ廣忠ヲ遁サ

シム叔軍ハ終ニ岡崎方勝タリ外記討死ス藏人カ家人
鳥居久兵衛從弟ナレハ是ヲ討取其指料ノ青江ノカヲ
分捕セシカ家ノ重代ナレハ外記カ子弥九郎景忠方へ送り
タリ鳥居源七ヲハ同臣松下清兵衛討取渠ハ始外記
カ譜代成シカ臣恨有テ藏人方へ往テ居タリ翌十七年
故主景忠方へ皈參ス此合戦信秀負タルヲ憤三左衛門
左衛門尉ニ何共シテ岡崎ヲ攻拔ヘシ然ラハ其方等カ
支配ニ與フヘシ依テ軍ヲ出サハ尾州ヨリ加勢可進ト
ナレハ弥兩人是ヲ計近日攻寄ントス廣忠ニハ重テ大

勢猶向ハ事危カラニ專スル処三左衛門其頭ナリト
考覓平三郎ヲ据汝忠倫ト懇意ナレハ可相計ト命ス
覓畏テ上和田一行安陪酒井等ト不和ニ付立退由ヲ
申忠倫幸ニ渠兄弟ヲモ招入度処ナレハ岡崎ヲ可攻
討ト評定ス此年十月十八日夜又評定ノ後忠倫ニハ
寢所へ入平三郎近所ニ伏テ叔寢所へ忍入忠倫ヲ
二刀刺其所ヲ遁出ル弟平十郎後助兼約ニ付城外
追来居テ同道ニテ立退ハ其跡ヨリノ追手手ヲ空
ス忠倫カ弟松平權兵衛重弘是ヲ口惜織田方へ益

通ニテ岡崎ヲ攻ムト山中城ニ取籠ル依之末弟松平
左近忠親同清藏親成同三藏忠成并左近子宮内
親乗ヲ始トシテ與カノ輩即等一所ニ揃籠同十一月
酒井石川大久保等三百余兵ニテ山中城へ押寄攻
ケレ防戦不叶夜ニ入テ篝火多燒捨テ權兵衛始
一族家臣不殘落失セ安々ト城ハ平ニ入夕リ織田
信秀聞テ口惜此上ハ自身兵ヲ率テ岡崎ヲ可攻トノ
支度ス此由岡崎へ聞ヘ今川へ加勢ヲ乞遣ス義元
心得夕リ遠州勢ヲ可遣併ラ當時ノ躰味方モ更ニ

憑ナシ事ヲ可疑ニ非スト云ヘ共法令ナレハ人質ヲ可
賜ト答ラル此儀最ナレハト嫡男竹千代殿六歳ナルヲ
駿州へ可送ト石川伯耆天野三之助上田慶宗金田宗八
松平與市彼是二十八人并阿部甚五郎正宣カ子徳千
代後善九郎同羊成ヲ伽トシテ被差漆陸地ハ敵城多ケレハ
西郡ヨリ田原ニ入り船ニテ送ルヘシ幸ニ田原ノ城主戸田
彈正忠憲光ハ當時ノ舅ナレハト此処へ入ル義元ヨリモ
迎トシテ飯尾勘助當所迄參居スル処ニ彈正カ子五郎
政光信秀カ方へ密通ニ付百騎計潮見坂迄出テ是ヲ

奪取御供ノ輩爰ヲ先途ト戦ニカトモ惣ハヲ始トシテ
多討死ス扱竹千代君并徳千代ヲ舟ニ乗セ熱田へ送り
古渡ノ城へ斯ト告ク信秀悦戸田五郎ニハ青銅百貫ヲ
與へ竹千代君等ヲハ熱田ノ地下人加藤圖書カ家ニ
置タリ高野藤藏ト云者常ニ来勞申ス信秀使者
ヲ以御嫡子此方ニ預リタリ今川ノ一味ヲ離信秀ト
和睦可有是不叶トナラハ御息ノ命ヲ賜ラント廣忠
ノ方へ申送ト云凡義元ト多年ノ好不可變何ソノ子
ノ愛ニ溺レテ長ク不義ノ名ヲ取ラニ愚息カ存亡其

方ノ心任ニ可被致トノ返答ナリ信秀斯ハ返答スル凡
終ニハ愛子ニ被羈味方ニ属スヘシト夫ヨリ名古屋
ノ方松寺ノ天王坊ニ押籠置タリ櫻井内膳信定ニハ
藏人信孝酒井左衛門尉等岡崎へ反心ニ付再謀反
ニテ織田方ト成ニ所ニ三左衛忠倫害ニ逢同弟等出
奔ニ付内膳氣ヲ屈スル節岡崎ヨリ櫻井ノ構ヲ可及
由聞傳大ニ驚大樹寺ノ和尚ヲ憑佗言セリ二度
敵タレハ不可叶ト有シカ凡和尚類ニ佗玉ハ又厚免
セリ藏人は是ヲ聞信定甲斐ナキ仕形ナリト怒吾一人

シテ岡崎ト勝負セント岡トニッ本ノ両城ニ軍兵入テ
敵對セシカ兎角岡崎ヲ攻落サント五百騎ヲ引率
シ同十七年戊申四月十五日大明寺表へ打出陣取
タリ酒井石川二百兵ニテ馳向シカ敵大勢ナレハ見
繕未合戦ナシ又大久保忠勝石川新九郎ヲ以射手七
十余人勝ツテ差添大明寺郷ノ藪ノ陰小塚ノ間ニ伏セ
隠ス扱合戦始リ入亂戦処ニ藏人大明寺郷ノ町
屋迄引テ備テ戦ントセシ処ニ岡崎勢ニ手ニ成テ
攻入ハ的ニ成テ討レ信孝モ流矢ニ左ノ脇腹ヲ被射

援馬ヨリ落テ死タリ故ニ敵兵悉ク退散ニ首百三
級ヲ得テ各凱旋ス

藏人討レケレハ三州ノ國士目ヲ附替岡崎へ属ス義元
聞テ廣忠ノ軍功拔群也ト褒美ニ連モノ事ニ一國
ヲ平均ニ可治トニ付先安祥ヲ攻落ニ信廣ヲ討取ニ
ト同十八年己酉二月六日雪齋和尚ヲ大将トシテ
五千ノ兵ヲ差向ル廣忠ニハ正月申頃ヨリ病氣ナレハ
安陪正就本多忠高大久保忠利等ヲ大将トシテ
三百余兵ヲ向ケラレ先岡ノ城ニ押寄攻タリ城主織田

信廣防戦セシカ拘難シトテ夜中ニ潜ニ遁出安祥城
ニ楯籠此由尾張へ聞へケレハ信秀下知シテ平手監物
清秀ヲ以五百騎ニテ安祥ノ後詰セシム雪齋ニハ
是ヲ聞駿遠兩勢ハ城ニ向テ攻へニ岡崎ノ面々ハ後詰
ノ勢ヲ防へシトナレハ安陪本多大久保ハ平手力陣ニ向
タリ平手安祥近ク来シカトモ日既ニ暮カレ岡崎勢
ハ出向テ陣ニ扣ケレハ軍ハ明日ノ事ト面々陣取ラ
シム岡崎衆評議シテ敵ハ長途ヲ来レハ人馬勞レ
テ今夜ハ能伏スヘシ一夜討可進ト三百余騎相印

相詞ヲ定テ丑ノ刻ニ攻入レハ尾州勢一戦ニモ不及本
國差テ逃飯此勢ニ乗岡崎方翌八日ヨリ安祥へ取
掛二三ノ丸追攻破ル時ニ城兵前嶋傳二郎力放矢ニ
中リ死者多シ本多忠喬モ此矢ニ中リ忽死ス廿二歳
ナリ榊原藤兵衛モ同討死セシカトモ岡崎衆急ニ攻
付大將信廣ヲ擒ニセント揉立ル平手ハ夜討ニ逢ニ後
手勢計ニテ陣セシカ此百様ヲ見テ安陪大藏方へ
使ヲ立テ曰信廣ヲ助命ニ被渡ハ竹千代殿ヲ送リ
人質替ニセント乞大藏悦雪齋ニ申セハ許諾ニ付

頼ヲ是ニ定名古屋ヨリ竹千代君ヲ迎ヘテ西野ニテ
兩人ヲ取替互ニ引退タリ織田玄蕃允信平同勘解由
左衛門信業竹千代殿ニ添出大久保忠勝忠利信廣
ヲ伴出テ取替タリ此時安祥落城ス係ル赴共ニヨツテ
酒井左衛門尉大原今村ノ三人モ首ヲ延テ不義ヲ
佗タリ渠等敵トハナリシカ一度敵對セス奮好有
者ナレハト厚免ナリ又櫻井内膳ト大給ノ源二郎
親乗後左近共
和泉守共等ニハ日和ヲ窺居タリシカ今日ヲ附
替岡崎へ追従ス其後竹千代殿駿州へ被送ニヨツテ

天野三郎兵衛景則供申叅ル義元憐ミテ宮ノ前ト
云ニ所ニ新家ヲ立置申徳千代モ相従フ御賜ニ
福嶋土佐守正資ヲ今川ヨリ附置馳走ナリ時ニ八歳
ナリ廣忠ニハ當春ヨリノ病氣重今十八年己酉
六月六日逝去廿四歳ナリ大樹寺ニ葬瑞雲院應政
道幹居士ト号ス其後慈光院ト改謚スト云

天正九年辛巳六月六日大樹寺ニテ三十三回忌アリ慶長
三年戊戌六月六日五十回忌アリ家光公御代慶安元
年戊子六月六日百年忌アリ皆大樹寺ニテナリ一説ニ

三月六日逝去ト云

廣忠ノ連枝ハ松平源二郎信康母ハ宮ノ善七娘

成譽上人

始ハ三州大恩寺十二代ノ住持後大樹寺十四代ノ住持天正三年四月逝ク女子母ハ

廣忠ト同腹始ハ松平源七郎康高ノ妻其死後酒井

左衛門忠次ニ嫁ス於風女子ヲ産ム此女子人質ト

ニテ今川氏真方ハ出ス

題岩松家二京兆及禮部兩流事跡下曰

岩松家系附錄先師為之考證其所論析可謂精確矣

惟其禮部京兆分流條下增入泰家一世者蓋失諸

考檢也應永世五年申狀所謂泰家則平高時弟四

郎左近太夫入道惠性初名而後曰刑部少輔時興

者是也足利氏有國之日指鎌倉之時稱先代故申

狀之言如此先師平生甚慎于選述援摭攷究未嘗

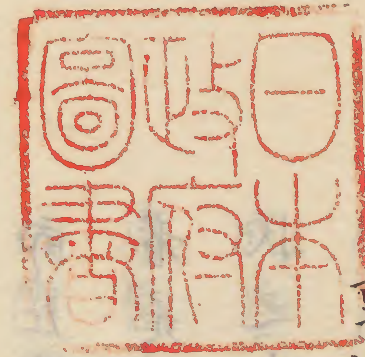
有一事之踈漏獨此一考成於易篲數旬之前豈得

非其精力漸致耗喪之故耶後人幸勿以此為為議

焉

享保乙巳歲月日

門人平元成識



新田三家考畢

